

## 「葦」第41号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 榊 寿 右

附属病院看護部における看護研究誌が今年も発刊される運びとなりました。大学病院として看護活動の一環として看護研究が行われるのは当然のことではありますが、毎日の忙しい看護の中で研究がおこなわれ、論文として出されることを大変喜ばしく思っております。昨年までは10:1看護で大変多忙な毎日を強いてきたことを大変申し訳なく思っております。しかし平成22年度から一般病棟での7:1看護が実現できるようになりました。看護研究に於いてもさらにレベルの高いものに仕上げていただきたいと願っており、研究心、探究心なくしてより良い看護もできないものと思っております。

本学は医学部に医学科と看護学科があります。今まで出されたこの研究誌に掲載されてきた論文に看護学科との共同研究が少ないという印象を持っております。確かに看護学科の教員は教育職で、附属病院の職員は医療職、そして定年も異なっていることも影響していることでしょう。しかし、医学科において、臨床の現場で働く教授をはじめとした教官は臨床能力が要求されます。一方、看護学科では臨床能力がなくても教官になれる状況にあります。今後、臨床の現場で看護を実践し、教育出来る者こそ看護学科の教官になるべきだし、そのためには附属病院の看護スタッフも教官として、看護学科に出向いていかなければならないでしょう。そして、レベルの高い看護研究とはどのようなものかを精査し、実行していく必要があると思っております。

わが国でも認定看護師、専門看護師が定着しつつあります。そして多くの看護師がそれを目指して頑張るのも世の流れかもしれません。しかしながら、それは同時に専門以外の看護ができなくなる危険性をはらんでいます。医師が専門医を目指し過ぎたあまり、臨床研修制度が導入され、総合医の必要性が叫ばれている現状と相通じるところがあります。チーム医療のなかで総合的に患者を看ることのできる看護師の存在は不可欠です。看護研究の在り方も専門性を問うものだけでなく、看護の基本を見つめ直す研究も重要と思っております。

以前の本看護研究誌にも書いたことがありますが、論文には研究の目的が明確で、その目的のための方法が述べられ、そしてその結果があり、他の研究や論文との比較検討がなされ、最後に目的に対する結論が記されてなければなりません。目的と結論を見ればその論文の意義が分かることが重要です。どんなに意義深い研究内容でも起承転結の明確な論文で発表される必要があります。それは今後への発展に繋がります。今回の研究論文集において、日々忙しい看護活動の中にあって意義深い起承転結の明確な論文がたくさん出されるのを楽しみにしています。